

■（67）社説

2013. 12. 20

新聞にはニュースを伝える報道機関としての役割と、それに対してどう考えるかという主張や提言を述べる言論機関としての役割があり、この2つが車の両輪のごとく機能しています。社説は後者の役割を担う最も重要な記事で、新聞社としての意見を発表し、読者が考える材料を提供しています。この社説を担当するのが論説委員です。

論説委員は政治、経済、社会、司法、国際、科学、文化、スポーツなど各分野での経験を重ねてきたベテラン記者たちです。朝日新聞社では二十数人の論説委員が平日に毎日1～2時間、その日はどの問題についてどんな論を展開すべきか討議したうえで、その議論を踏まえて社説が執筆されます。

社説は難しいという先入観があるからでしょうか、読まれない記事の代表のようですが、過去にはこんな社説もありました。1997年1月15日の朝日新聞の社説の冒頭です。

「都はるみの歌『北の宿から』に、着てはもらえぬセーターを寒さこらえて編んでます、という一節がある。成人式を迎えたみなさんに贈るつमोरりのこの文章は、(中略) 歌の文句を拝借するならば、読んでもらえぬブンショウを寒さこらえて書いてます、という気分なのです」

2013年の「成人の日」、1月14日の朝日新聞の社説は、「例年、きょうの社説は20歳へのメッセージを送ってきた。今年は新しい仲間を迎える大人社会の側に向けて書きたい。もちろん、自戒を込めて。新成人の世代は、あれこれとレッテルを貼られてきた。薄っぺらい教科書で学んだ、勉強不足のゆとり世代。内向き志向で、受け身。そう決めつけずに、少し冷静に見つめ直してみよう。(以下略)」と書き出されていました。

どうでしょうか。中学生には十分理解できるでしょう。「成人の日」のほか、「子どもの日」「体育の日」などの社説を、年に1回は授業などで取り上げ、要約と自分の見出しを付けさせて、意見を書かせたいものです。

(鈴木伸男・全国新聞教育研究協議会顧問)